

牧場の観光的利用の現状と問題点

高畑 滋

(東北農業試験場)

A Review of the Present Situation of Agro-tourism Development on the Public Pastures

Shigeru TAKAHATA

(Tohoku National Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

牛肉の輸入自由化以後東北の肉牛生産も停滞している。特に公共牧場を中心とした放牧による繁殖、育成が減少している。もともと牧場の立地は見晴らしの良い景勝地であり広々としたオープンスペースとなっているのが特徴である。牧場の社会的使命と経営上のメリットから観光的利用が可能などころでは積極的に再整備を進めるところがでている。農水省畜産局も「ふれあい牧場」整備事業として助成をしている。本来の牧場機能を維持しつつ多面的な機能を発揮するための問題点を検討した。

2 ふれあい牧場調査

草地協会では1990年に全国1,197か所の公共牧場にアンケート調査を行い506か所(42.3%)の牧場から回答を得ている。19%の牧場が現在ふれあい牧場機能を持っており、今後希望する牧場は35%あるが今後とも希望しないとする牧場が47%ある。地域的には牧場の数が少ない西南暖地でふれあい機能強化を希望する割合が高かったのに対し北海道、青森、岩手などの牧場地帯で「希望なし」が半数を越えている。これは観光的利用に頼らなくても牧場運営が出来ることと、観光的利用のデメリット面が大きいことを意識してのものであろう。牧場の観光的利用はどこでも出来るものではなく、観光立地条件と経営立体的意欲次第であらう。

ふれあい牧場のモデルとして全国から10牧場を選び個別に現地調査を行った。その概要は次の通りである¹⁾。

天童市高原放牧場(山形県天童市)牧野公社営、面積65ha、放牧頭数88、来訪者数147,000人、研修センター、宿泊施設、レストラン、野球場、テニスコート、スキー場
花立畜産センター(秋田県矢島町)町営、面積125ha、放牧頭数ジャージー種約100頭、来訪者数10,000人、宿泊施設、キャンプ場、テニスコート、スキー場
里美共同模範牧場(茨城県里美村)牧場は農協営、施設は村営、面積180ha、放牧牛388頭、綿羊30頭、来訪者17,000人、体験実習館、野外活動センター
大笹牧場(栃木県今市市)農協営、面積342ha、放牧乳用牛342頭、来訪者76,000人、直売店、レストラン
武尊牧場(群馬県片品村)牧場は村営、観光は株式会社営、

面積109ha、放牧乳用牛29頭、来訪者30,000人、宿泊施設、レストラン、売店、バンガロー、スキー場
八ヶ岳牧場(山梨県小淵沢)県協議会、企業局営、面積614ha、放牧乳牛286頭、肉牛71頭、まきば広場、レストハウス、ポニー牧場、野鳥ゾーン、畜産資料展示施設
八束村公共育成牧場(岡山県八束村)村営・農協管理委託、面積37ha、買い上げ育成牛ジャージー種155頭、乳製品加工施設、農協営「ふれあいジャージー牧場」計画
中
姫鶴牧場(愛媛県柳谷村)村産業開発公社営、面積81ha、放牧肉用牛250頭、来訪者10,000人、宿泊施設、キャンプ場、グラウンド、フィールドアスレチック、フェスティバル
くじゅう高原ファーム(大分県久住町)牧場運営委員会のもとに部門別に会社営、面積135ha、放牧牛160頭、来訪者5か月で60,000人、ガンジー乳加工直販、レストラン、ホテル、キャンプ場、みどりの王国
鏡山牧場(宮崎県北川町)畜産公社営、面積82ha、放牧肉牛130頭、他に綿羊・鶏・ポニー、来訪者130,000人、展望台、売店、畜産展示室、ハンググライダー、グラススキー

3 観光部門の展望

全国から10か所の牧場を選んだ調査であるが、それぞれ立地条件も違い、運営主体も経営方針も異なり一般化することは出来ない。本来の牧場機能と観光事業との複合割合もそれぞれ異なっているが、ここで取り上げた事例は牧場運営の度合を低下すること無しに観光部門を取り入れているものである。観光牧場の中には一過性不特定多数の観光客を相手とし家畜はペット程度の役割しかもたないものもある。農産物の生産を第一義とし、牧場の多面的機能を利用した複合経営の一つとして観光部門をとらえないと、観光投資が増大し経営上のリスクが大きくなる。たとえ成功してもそれは農業とは言えないものになっているであろう。最近の観光傾向としてアウトドアライフが好まれ、本物の自然指向が強い。牧場を求めて来る市民にとってペット程度の家畜では満足しない。厳しい自然と調和しながら健康に役立つ農産物をしっかりと生産している牧場でなければ観光的にも魅力がない。牧場側としては観光客に好まれるオープンスペースを生産の場としている畜産の社会的な使命として市民の利用を考えなければならない。そして少しでも牧場運営上に役に立つように観光部門も取り入れて

いきたい。観光部門の波及効果は大きく、青少年の教育、消費者との交流・産地直販、社会資本の充実、後継者育成など地域振興にも展望が開けるものである。特に観光牧場としては青少年のレクリエーションの場として展望を開きたい。グループで自然に触れ農作業を体験し新鮮な食べ物を楽しむことは、子供たちの発育のために大切なことである。

4 ふれあい牧場協議会

1992年11月に発足したふれあい牧場協議会には東北から七つの牧場が参加している。いずれも牧場本来の業務を十分果たした上で観光的な部門を経営に取り入れている牧場である。

ふれあい牧場協議会会員牧場

県名	牧場名	所在地
青森	白萩平ふれあい牧場	田子町
	五所川原市宮毘沙門牧場	五所川原市
岩手	葛巻町畜産開発公社	葛巻町
	室根高原牧場	大東町
	遠野市畜産振興公社	遠野市
福島	白河高原牧場	西白河郡西郷村
	郡山市畜産振興公社	郡山市

東北で七か所しか加盟していないのは寂しい状況であるが、グリーンツーリズムとかファームインといっている農村の観光的利用の一環として、各自治体や農協レベルで検討がすすめられれば増加することが期待できる。あくまでも農業の新しい分野の一つと位置付け、観光業界のやり方ではなく独自の情報宣伝網をつかったニュービジネスを興す気構えが必要である。

5 観光的利用の問題点

草地整備、牧柵、牧道以外の「ふれあい牧場」施設投資は直接家畜生産に結び付かないので、過大な投資はしないようにすべきである。

トイレ、ゴミ処理などの費用も牧場経費と切り離して処理できるようにした方がよい。

できれば単なる観光客でなく牧場生産物の消費者としての市民の来訪を歓迎すべきであって、消費者団体などとの連携が望ましい。産地直販の一形態と位置づける必要がある。軽作業や生産物加工などは市民の体験学習として参加してもらおうことも考えられる。

ゴルフは始めは放牧地での遊びから出発したと言われるくらいで、牧場とは共存できるものだと思う。しかし、日本のゴルフ場は独特な集約管理をしており、プレーもコンベンション中心になっているので、家畜放牧とは共存できる状態ではない。それでも中には自然愛好派ゴルフ場があってもよいのではないだろうか。農薬を使わずフェアウェイの草刈りは羊の放牧で行う牧場ゴルフ場ができれば人気は高ま

るとおもう。牧場の立地条件はゴルフ場と共通するものがあるのでゴルフ場開発か牧場存続かという問題を抱えているところも多い。ゴルフ場と牧場の対比を表にあげた。個々のケースについて影響調査を行って慎重に選択することが望ましい。

表 ゴルフ場開発のメリットとデメリット (里美牧場の例)

メリット	牧場名
雇用の増大	牧場面積の縮小
地代の増大	牧区界変更による作業困難
税収増加	地形変更による災害危険
道路整備	自然景観の劣化
入込客増加	農業汚染
大会・イベント効果	水資源の汚濁・枯渇
	ハイキングコースの分断・縮小
	高額会員権・使用料への差別感
	自動車増加による大気汚染・事故
	開発費の地元財政への圧迫
	青少年育成の場との違和感

スキー場は現在でも牧場と共存しているところが多い。スキーゲレンデは夏に植生管理をする必要があり数百万円の経費をかけているので、放牧によって植生管理することは双方にとって利点がある。牧柵が問題になるが、雪が多い牧場では通常冬にはバラ線を下ろしているため作業が増えるものではない。ゲレンデを放牧地にする場合にゴミ、異物が家畜を害することが心配される。ジュースカンのプルタブは家畜の口に入りやすく危険である。スキー場の売店ではタブの離れないカンを売るようにし、ゴミ処理について客のモラルを徹底する必要がある。

牧場の冬期間の利用としてスキー場が立地する例は多いが、現在スキー場であっても夏期間畜産利用していない所も多い。ゲレンデ整備費をスキー場からもらって家畜による草地管理をする経営が有ってもよいのではないだろうか。

6 まとめ

中山間地に多い牧場では、牧畜生産機能だけではなく保健休養機能も高い。この特性を生かした複合経営として牧場の観光的利用を取り上げた。観光的利用の現状はいろいろな形態があり一般化できないが、牧場のもつ緑のオープンスペース、動物とのふれ合い、冷涼・清新な空気が人々を惹付ける。観光的利用を牧場運営の支えとなるように取り込むことには様々な問題がある。それは個々の牧場の問題であり地域計画として検討されなければならないものであり、これを支援する情報ネットワークの構築が望まれる。

引用文献

- 1) 日本草地協会. 1990. 公共牧場機能強化促進調査報告書. p.11